

令和6年度 学校経営報告書（自己評価）【全日制】

学校番号	40	学 校 名	県立科学技術高等学校	校 長 名	小野 聡
------	----	-------	------------	-------	------

本年度の取組（重点目標はゴシック体で記載）

	取組目標	成果目標	達成状況（昨年度）	評価	成果と課題
ア	日常の学習習慣を定着させる。	・「授業に主体的に取り組んでいる」と答える生徒90%以上	・ 84.6% (83.7%)	B	・ 数値目標は下回ったが、目標をおおむね達成することができた。 ・ 保護者については「わからない」の回答が20.5%あるため、授業について保護者に届くよう、保護者会等での説明が課題である。
		・「授業の内容がよく分かる」と回答する生徒90%以上	・ 75.0% (79.0%)	B	
		・「教員は授業を大切にするとともに、分かりやすい授業を行おうと努めている」と答える保護者 80%以上	・ 74.6% (75.4%)	B	
		・ 1日の授業、課外活動、家庭学習の合計学習時間が10時間となる生徒50%以上。	・ 42.9% (42.9%)	B	・ 10時間達成生徒数の割合が年々減少傾向となっている。
		・「学習と部活動等の課外活動の両立に努めている」と答える生徒70%以上	・ 62.3% (64.7%)	B	
		・ 教養力テストの実施	・ 年間 11 回実施した。	A	・ 来年度以降は業務改善および生徒の主体性の観点から教養力テストを廃止する。
		・ 手帳や I C T 端末の活用等により、「生活習慣を整え、学習時間やスケジュールの管理ができている」と答える生徒 60%以上	・ 48.1% (25.0%)	B	・ 3年生では、放課後の補講や個別指導のスケジュール管理に手帳を活用する生徒が多く見られた。 ・ 手帳を効果的に活用しているクラスもあるため、活用事例を校内全体で共有して行く。 ・ スケジュール管理の方法等を検討する。

様式第3号

個々の生徒のニーズに対応した進路指導体制を確立する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「自分の将来に対する夢や希望を持っている」と答える生徒80%以上 ・「信頼できる先生がいる」と答える生徒80%以上 ・「きめ細やかで適切な進路指導が成されている」と答える保護者80%以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体 71.4% (71.9%) 1年 64.0% (63.4%) 2年 65.6% (63.3%) 3年 84.1% (88.2%) ・全体 78.6% (81.1%) 1年 74.3% (80.5%) 2年 77.5% (75.4%) 3年 84.1% (86.5%) ・全体 83.0% (76.1%) 1年 80.4% (68.3%) 2年 78.2% (73.1%) 3年 91.7% (88.1%) 	<p>B</p> <p>B</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学年が上がっていくごとに数値も上がっているので、今後も3年間を見通した指導体制を堅持していきたい。 ・学年間、担任間、各分掌と足並みを揃え、3年間を通じて一貫した指導体制を維持することができた。 ・進路指導における志望理由書や面接等の指導を全職員で行うことで、生徒一人一人に寄り添った指導を行うことができた。 ・補講の種類（理数科の朝・放課後・土曜補講、工業科の放課後・土曜補講）が多く、教員の業務負担が課題である。
	<ul style="list-style-type: none"> ・国公立大学合格者70人以上 ・就職内定率100% 	<ul style="list-style-type: none"> ・国公立大学合格者 39人 (令和7年1月16日現在) ・就職内定率 100% 	<p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・全職員の協力があり、生徒の進路実現に繋げることができた。学校全体で指導することにより、担任の負担軽減につなげることができた。
部活動を効率的に実施する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「部活動に参加している」生徒80%以上 ・「学校が楽しい」と答える生徒80%以上 ・「部活動ガイドライン等を踏まえ、適切な指導ができた」と答える教員90%以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・89.3% (94.0%) ・81.9% (83.4%) ・87.5% (86.0%) 	<p>A</p> <p>A</p> <p>B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中学時に部活動へ所属しない生徒が増加しているため、部活動の在り方などを検討していく必要がある。 ・部活動を通して、他の生徒の模範となり学校を牽引していくリーダーを育成していきたい。 ・部活動ガイドランを踏まえ、部活動と勉強の両立ができるよう工夫を凝らし、効率的・効果的な活動を行っていく。
生徒主体の活動を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒会が企画した事業の実施年2回以上 ・地域連携やボランティア活動参加者の増加 	<ul style="list-style-type: none"> ・行事は生徒が主体的にかかわれるように企画されている。73.9% (80.3%) ・10回 104人参加 	<p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体となって、体育祭や文化祭を無事に執り行うことができた。今後は担当教員の負担軽減につなげるための改善が必要である。 ・ボランティア活動は、生徒会を中心に積極的に参加することができた。

イ	<p>探究的な教育活動を推進する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・課題研究への主体的な取組を促すとともに、STEAM 教育等の教科横断的な取組を実践する。(大学や企業等との連携) 	<p>【機械工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題研究では「災害用給水ポンプ」の研究など 6 テーマの発表を行った。 <p>【ロボット工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題研究では「産業用ロボットの機構と制御に関する研究」など 14 テーマの発表を行った。 <p>【電気工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題研究では「潮流発電の基礎研究」など 6 テーマの発表を行った。 <p>【情報システム】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学教授や企業技術者の講習会等を実施した。 <p>【建築デザイン】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学等と連携し、講演会等を実施した。 <p>【都市基盤工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体となって課題研究等の活動に取り組めるようにする。また外部機関と連携し、学習内容を深める。 ・課題研究やものづくりに対して、STEM 教育を考慮した学習課題に取り組む。 <p>【電子物質工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・静岡大学、静岡県立大学、常葉大学出前授業（2 年） 	A	<p>【機械工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒主体で探究できるように支援を行った。 ・進学希望者に対して、担任や進路課と連携し学科内でサポート体制を構築し実践した。 <p>【ロボット工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・製作、研究など 14 のテーマを少人数で取り組み、探究的な活動を実施した。 <p>【電気工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外部でのイベントを意識したものづくりを行い、小中学生に、電気工学に興味関心を持たせる作品作りを行うことができた。 <p>【情報システム】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・広大連携による大学の講義及び民間企業との WEB サイト制作企画や校外活動、自衛隊による情報セキュリティ講座を実施した。 <p>【建築デザイン】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公官庁や各種協会、企業と連携し、出前授業や現場見学会を実施した。地元企業と連携したキャリア教育の企画を実施、次年度も継続して実施していく。 <p>【都市基盤工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・長沼地区の自治会や県・市などの行政、施工を行う民間企業など、必要な外部機関と連携しながら、課題研究や授業を展開し、実践的な課題解決に取り組んだ。 ・静岡市の治水対策構造物についての力学的な構造を学び、STEM 教育につなげた。 <p>【電子物質工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学で行っている専門分野知識と出前授業等を通して、大学への進学意識を高めることができた。
---	------------------------------	---	---	---	--

様式第3号

			<ul style="list-style-type: none">・静岡県生活科学検査センター訪問（3年）・課題研究テーマ（電子5テーマ、化学6テーマ） 【理数】 <ul style="list-style-type: none">・出張授業等を適切に実施できた。・課題研究の活動を論文や学会報告など、外部で発表できた。		<ul style="list-style-type: none">・課題研究等へ向けた専門教科指導に繋げることができた。・電子系・化学系の両分野へ興味・関心を持たせるよう、実習テーマ等について検討していく。 【理数】 <ul style="list-style-type: none">・課題研究では、教科や学科を横断した取り組みが増えている。県内の大学や高校と連携して、探究活動をより深めていきたい。
専門分野の能力を向上させるとともに、必要な資質を育む。	<ul style="list-style-type: none">・全国大会出場、全国規模のコンクール等の入賞・国家資格等の高度な資格に挑戦させ、受験者数及び合格者数の増加。	【機械工学】 <ul style="list-style-type: none">・技能検定（2級旋盤1人、機械検査5人）合格。・3級テクニカルイラストレーション CAD16人受験。・機械検査1人受験。・JIS 溶接技能者評価試験3人、旋盤3人合格。・ものづくりマイスター、静岡県講師派遣事業の活用 【ロボット工学】 <ul style="list-style-type: none">・基礎製図検定（24/41、59%）・機械製図検定（32/39、82%）・第二種電気工事士14人合格（14/32人、44%）・技能検定（シーケンス制御）・静岡県ロボット競大会予選敗退・若年者ものづくり大会 CAD部門出場・静岡県ものづくり競技大会（シーケンス、機械 CAD）	A	【機械工学】 <ul style="list-style-type: none">・ものづくり競技大会（旋盤）東海大会1位、全国大会敢闘賞・学科研究部での活動を通して、ものづくりコンテストなどには1年次から参加することができるため、生徒達に様々な経験を積ませていきたい。 【ロボット工学】 <ul style="list-style-type: none">・電気工事士については、年度当初より補修を繰り返したが行ったが例年の実績を大きく下回った。生徒の実情に合わせた指導を柔軟に行う必要がある。・ロボット大会は長期的な取り組みが必要であった。	

		<ul style="list-style-type: none"> ・ロボットアイディア甲子園 県大会敗退。 【電気工学】 ＜高度な電気の資格取得＞ ・第三種電気主任技術者（電験三種） <ul style="list-style-type: none"> 3 年 全合格 4 人 1 科目合格 1 人 2 年 3 科目合格 1 人 1 科目合格 3 人 ・第一種電気工事士 <ul style="list-style-type: none"> 筆記合格35人 （3 年: 3 人、2 年:32人） 技能試験合格33名 （3 年: 4 人、2 年:29人） 【情報システム】 ・日本情報オリンピック競技プログラミング、若年者ものづくり競技大会に出場。 【建築デザイン】 ・二級建築施工管理技術検定 合格者63%。技能士は今後 13人が挑戦する。 【都市基盤工学】 ・ジュニアマイスター顕彰制度 <ul style="list-style-type: none"> ゴールド 41%（16人） シルバー 18%（7 人） ・2 級土木施工管理技術検定 試験合格率92% ・2 級造園施工管理技術検定 試験合格率87% 	<ul style="list-style-type: none"> ・ロボットアイディア甲子園は 1 年生が中心に出場した。今年度の反省を来年度に活かしたい。 【電気工学】 ・電験三種、第一種電気工事士の資格試験において、開校以来一番の合格人数であった。 ・難関とされる第二種電気主任技術者一次試験に 3 年生が 2 科目合格した。 ・第一種電気工事士技能練習時間が、放課後遅くまでとなり、生徒が部活動に参加できず、また教員の勤務時間外での活動となっていることが課題。 【情報システム】 ・パソコン甲子園、日本情報オリンピックにおいて敢闘賞を受賞した。 【建築デザイン】 ・高度な資格の受験者は増加し、46 人中 29 人が合格。 ・働き方改革を踏まえた指導（時間外活動の超過）が課題。 【都市基盤工学】 ・ジュニアマイスター顕彰制度においては目標に達成しなかったが、特別表彰に 3 人が該当した。 ・施工管理技術検定においては、昨年度を上回る合格率であった。
--	--	---	--

様式第3号

			<p>【電子物質工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・危険物取扱者乙種4類19人（合格率 46%） ・毒物劇物取扱者 1人（合格率 33%） ・第二種電気工事士 2人（合格率 66%） ・アマチュア無線4級 41人（合格率 100%） ・東海ものづくりコンテスト化学分析部門出場 ・県高等学校 ARDF 競技夏季県大会学校対抗 優勝 ・第19回全国高等学校 ARDF 競技大会出場 ・WCR 全国大会出場 <p>【理数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化学グランプリ（32人）、地学オリンピック（1人）、科学の甲子園（53人）参加。 		<p>【電子物質工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・危険物取扱者試験は、他学科の生徒たちにも試験日程の連絡をし、工業科の資格として興味を持たせることができた。 ・電子系の資格である第二種電気工事士について、筆記や実技の対策指導をすることができた。 ・ARDF 競技大会で全国大会に出場することができた。 ・資格取得への興味関心を持たせる情報伝達の徹底と上位資格取得に向けての指導が必要。 ・資格取得に向けた教員の指導力向上と生徒への指導時間の確保が課題。 <p>【理数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・化学グランプリや科学の甲子園などに参加し、生徒の進路実現に役立てることができた。
		・全学科で技術者倫理に関する指導を行う。	・情報モラルや公害問題等、過去の事例及び未来への注意点等を、座学と実習を通して指導した。	A	・工業の技術が、生活の中でどのように利用されているのか、学習した内容がどのように役に立っているのかを実感を持たせることにより、技術者としての責任や倫理観について継続した指導を行った。
ウ	グローバル化への対応と国際理解教育を推進する。	・「充実した海外研修ができた」と答える生徒90%以上	<ul style="list-style-type: none"> ・台湾海外研修の参加者19人 充実した研修であったと回答した生徒 100% ・郊外海外派遣事業を積極的に紹介し、参加した生徒の支援をした。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・海外研修を企画、運営し36人の希望者から20人を選抜した。 ・昨年度以上に様々な海外派遣事業に、生徒が応募した。海外インターンシップに参加した生徒のプレゼンテーション指導を行い、全校生徒にその益を還元した。

様式第3号

	<ul style="list-style-type: none"> ・羅東高校（台湾）と連携し、交流を促進する。 ・英語検定等の受験者数の増加（CEFR B1及びA2レベルの生徒数の増加） 	<ul style="list-style-type: none"> ・羅東高校と5月にオンライン交流、12月に羅東高校に19人が訪問し、交流活動を行った。 ・進学、就職を問わず全生徒に英検の取得の必要性を周知し、受験を促した。 	<p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの生徒が自発的に交流活動に参加し、有意義な体験をすることができた。 ・英検の受験者数は、昨年度とほぼ同じであった。（理数科3年生合格者：準2級26人、2級11人）
持続可能な社会の一員としての素養を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> ・「挨拶がしっかりとできている」と答える生徒95%以上 ・「身だしなみがしっかりとできている」と答える生徒95%以上 ・「スマートフォン・携帯電話は適切に利用している」と答える生徒80%以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・94.3%（96.1%） ・93.4%（96.2%） ・75.3%（75.9%） 	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶や身だしなみについては、生徒の認識と教員側の認識の多少の違いを感じる。生徒心得を変更し、より一層の充実や理解を深めていきたい。 ・スマートフォンや1人1台端末の利用方法については、依存度が高く、生活習慣に影響を与えているため、呼びかを高めていきたい。
	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人当たりの年平均図書貸出冊数 2冊以上 ・図書館来館者数延べ6,000人以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・3.3冊（3.2冊）貸し出し冊数は現在延べ3,077冊（3,014冊）（令和7年1月10日現在） ・5,729人（6,550人）（令和7年1月10日現在） 	<p>A</p> <p>B</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・7月に「私の一冊」を発行し、その中で紹介された本を展示して生徒の読書活動を促した。 ・6月と11月には「読書キャンペーン」を行い、生徒の図書館利用の促進を図った。その後、頻繁に図書館に来る生徒が増えた。 ・12月には雑誌配布を行った。その他にも定期的に「図書館NEWS」や「新着図書紹介」を発行したり、進路課と協力して「小論文にお勧めの本」を増やし、小論文コーナーを充実させたりした。このような活動を通して、図書館に来て本を借りていく生徒が増えていると感じている。
	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップ、保育体験実習に参加した生徒の満足度90%以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・インターンシップ90.5%（98.0%）（参加生徒98名） ・保育体験90.9%（91.6%）（参加生20人） 	<p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・企業やこども園の協力を得て実施することができ、参加した生徒の進路に対する意識付けに効果があった。 ・こども園との交流活動において、学科の特性等も活かしながら園児たちと遊びの体験ができた。生徒たちは、園の先生方の指導を注視し、有意義な実習となった。

様式第3号

		・資源の大切さを意識させるとともに、「3Sの意味を理解し、積極的に取り組んでいる」と答える生徒70%以上	・79.7% (54.6%)	A	・実習や課題研究では、資源の大切さや安全教育、3S活動を推進し、大きな怪我はなかった。 ・保健委員が各教室の清掃用具入れの整備を行った。 ・3S活動は、集会などで呼びかけを行ったが、意識づけについて課題である。
		・「交通ルールの遵守に心掛けている」と答える生徒90%以上	・全体93.2% (93.0%)	A	・交通安全について、日頃から呼びかけを充実させ働きかけを行うことができた。 ・事故後の対応も含め、交通安全に関する継続的な指導を繰り返し行っていく。
エ	カリキュラム・マネジメントを推進する。	・新しい教育課程の編成	・新教育課程に対応した授業展開を実践した。	A	・新教育課程完成年度であったが、3年間を通してみて問題点を洗い出し、教育課程の変更を検討した。 ・社会に開かれた教育課程について各学科、教科と情報共有することが課題。
		・学校運営協議会制度を導入して、社会に開かれた学校を具現化する。	・今年度から新たに学校運営協議会を設置した。	A	・7人の学校運営協議委員を選任し、全3回の協議会で学校運営に関する基本方針等について意見をいただいた。
	特別支援教育体制を確立する。	・「教育相談だより」を、月1回以上発行	・「教育相談だより」を生徒向けに月1回以上発行した。	A	・臨時号を含め工夫された内容で発行できた。読者数が増えるようにさらに努めていきたい。
		・1年生全員を対象としたカウンセリングを実施	・1年生全員を対象にしたカウンセリングを実施した。 ・相談室をほぼ毎日開室することができた。	A	・1年生全員へのカウンセリングは、入学後の不安などを担任や部活動顧問などと情報共有することができ、その後の支援や指導につながった。
		・個別の指導計画及び支援計画の作成	・個別の指導計画及び支援計画の更新を担当や保護者とともに行うことができた。	A	・年間を通して、特別な支援を必要とする生徒の周知ができた。更に、多くの先生方に特別支援への理解が深まるように情報共有に努めていきたい。
	教職員の資質・能力の向上を支援する。	・「研修の成果を授業改善や学校運営に役立てた」と答える教員90%以上	・97.6% (97.6%)	A	・研修の成果を授業改善や学校運営に役立てた教員が、昨年度と同数で目標を達成できた。
		・授業参観した教員70%以上	・80.0% (77.8%)	A	・授業参観を積極的に呼びかけ、授業参観をもとにした教科別研修会を奨励することで、授業参観した教員など、他の項目も昨年より増加した。
		・授業力自己診断を実施した教員90%以上	・80.0% (86.4%)	B	・県総合教育センター主催の研修会や各教科の教育研究会等に積極的に参加し、実践例や他校の状況など
		・多様な測定ツールを用いてP	・100% (95.1%)	A	

様式第3号

		<p>DCAサイクルによる授業改善に取り組んだ教員90%</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「観点別評価を適切に実施している」と答える教員70%以上 ・「日常的に授業でICT機器を活用した」と答える教員60%以上 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 88.8% (87.7%) ・ 97.5% (69.2%) 	<p>A</p> <p>A</p>	<p>を知ることができ、とても参考になった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 評価規準作成について、情報提供を学科長・教科主任を通して行うことができた。 ・ ICT機器の活用に関する研修を通して、積極的な活用につながっている。
	教職員のメンタルヘルスの増進及びコンプライアンスの徹底を図る。	・メンタルヘルス及びコンプライアンスに関する研修を随時実施	・県教委からの通知（コンプライアンス通信等）にあわせて随時実施した。	A	・教職員のメンタルヘルス及びコンプライアンスの徹底について、随時、声掛けや研修を行った。
	学校教育活動に関する広報を充実する。	・ホームページを月15回以上更新	<p>・「校長ブログ」更新回数 20回以上/月</p> <p>・授業や現場見学の様子を、SNSを通して情報発信した。</p>	A	<p>・学校ホームページで多岐にわたる話題の情報発信ができた。</p> <p>・ホームページ閲覧者数カウンター 令和6年1月400万回 ※約11ヵ月で100万回 令和6年9月500万回 ※約7ヵ月で100万回</p> <p>・都市基盤工学科では、インスタグラムを開設し授業での取り組み等を紹介した。</p>
		・ものづくり教室の実施や校外でのイベント等への参加を推進する。	<p>【全学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・市内公立高校相談会に全学科が参加した。 <p>【ロボット工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生ロボット教室の開催（参加者10名） <p>【理数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・中学生を対象とした科学教室を8月、9月、11月に計画し、3回実施した。 	A	<p>【全学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・8月にツインメッセ静岡で行われた市内公立高校相談会に全学科が参加し、中学生や保護者にPRすることができた。（来場者数約1,900人）中学生数の減少が著しく、PRの重要性が増している。 ・一日体験入学では、生徒主体の学科説明や発表を行い、各学科の特色等を知っていただいた。 <p>【ロボット工学】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ロボット教室に参加した中学生が、体験入学やオープンスクールにも参加してくれた。 <p>【理数】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・科学教室への中学生の参加者は、60人（定員60人）。

様式第 3 号

	校務の円滑、かつ適切な実施を推進する。	・全職員が校務で共有サーバを使用する。	・共有サーバからクラウドサーバへ移行する準備を進めた。	A	・クラウドへの移行に際し、容量の問題があり、各部署で保存データの精査が必要である。また、アクセス権の設定ができないため、機密保持のため、パスワードをかける等の対応が必要となる。
		・「業務改善を心掛けた」と答える教員60%以上	・98.8% (93.8%)	A	・Cラーニングを活用し、欠席連絡や保護者への連絡等を効率的に行った。 ・デジタル採点ソフト「百問繚乱」を活用し、採点時間の短縮につながっている。 ・「スクラップ&ビルド」により、業務の効率化、多忙化解消及び教育の質の向上を図り、I C Tの効果的な活用について継続的に検討していく。
		・施設・設備の点検の日を設けP F I 担当者との点検を月1回以上実施 ・施設・設備の整備、省エネ・省資源への取組を進め、コスト意識を高め、消費電力量を削減	・毎月1回以上の点検を行い、危険箇所や不良箇所の情報共有及び改修することができた。 ・夏季（6～9月）の使用電力量が前年度比で2%増加した。	A B	・点検及び小規模な改修は速やかに対応できた。今後もP F I 事業者と連携を密にして、危険箇所の解消に努めていく。P F I 事業者が改修するものか特定できない修繕については、県教委と相談して、迅速に対応していく。 ・特別教室へのエアコン増設や夏季の猛暑、酷暑が続いた本年度は、夏季の使用電力量が前年度比で微増となったが、今後もこまめな消灯による節電など、効率的な使用を呼び掛けていく。